

文学作品にみられる身体について 谷崎潤一郎の諸作品を手がかりとして

A study of body appeared in Literary Work
with reference to the works of Junichiro Tanizaki

山田岳志
Takeshi YAMADA

The aim of this study is to make clear the literary image of body in relation to the social structure from the late Taisho era to the early Showa era.

For this paper, the works of Junichiro Tanizaki examined here.

Literary works have been thought to be a useful means of seeing of body. Literature makes it possible to analyse contemporary society more realistically than by social science, because it tends to show the time and society more vividly by its free imagination. To explain body through literature seems to be most suitable approach.

For this point of view, the image of body appeared in literary work from the late Taisho era to the early Showa era discussed in this paper, mainly concerning body treated in the works of Junichiro Tanizaki.

1. はじめに

モダニズムの作家たちが「近代的自由」の象徴として掲げたものにスポーツがある。このようにモダニズムの作家たちが「スポーツする身体」に関心をしめたのも、阿部が『スポーツ小説』において、「スポーツを通じて、現代の生活を幾分でも批判したいとおもひ、そして暴露とまでは行かないまでも、スポーツマンとそれを取巻く生活を解剖してみたい気もあった。あるひはその英雄主義を、現代の肉体文明を、描寫してみたい気もあった。」¹⁾ というように、阿部は身体問題を社会問題として捉えながらスポーツの価値論と「近代的自由」との係わり方を論じているのである。このように昭和初期には「スポーツ小説」という呼び名が定着するほどに多数のスポーツ物がモダニズムの作家たちによって書かれたのである。本稿の目的は昭和初期におけるモダニズム文芸と身体・スポーツの係わり方の追究の予備的な試みとして、その先駆的作品と思われる『痴人の愛』における女主人公のナオミの身体の西洋化の意義について概観してみたい。

さて、『痴人の愛』は「大正後期社会に起こりつつあった社会的変化」²⁾ を忠実に反映した作品であると言われ

る。この作品の女主人公ナオミの生き方は大正後期社会から昭和初期社会にかけての典型的な「新しい女」の姿であったと指摘されている。³⁾ このように「文学はたしかに一つの社会の表現である」とか、文学作品は「時代の風俗を映し出すリアリズム小説としての性格をもつ」と言われよう⁴⁾ 文学作品にみられる社会状況や人々のメンタリティといった時代像は、社会史や民衆文化の研究にとっては実証的研究にも劣らぬ資料的価値があるように思われる。

そこで、本稿においても文学作品をそれ自体、社会と積極的に係わることによって意味をもつ自立した文化社会学の一フィールドとして捉え、「身体をめぐる時代環境を鋭敏に感知した作品」⁵⁾ として注目される『痴人の愛』を拠り所としてテーマへのアプローチを試みる。

さて、大正後期社会、つまり関東大震災後の社会は特にアメリカの影響の下に経済、思想、文化、風俗等が変容していき、モダンな都市文化が形成されていくようになる。「殊に此の頃のやうに日本もだんだん国際的に顔が広がって来て、内地人と外国人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入って来る。男は勿論女もどしどしハイカラになる」⁷⁾、『痴人の愛』の書き出しである。この一節に大正後期社会の状況が集約されているように思われる。進行する国際化、その結果としての外国思想の流入や日常生活の西洋化、そして都市化現象

と大衆社会の出現は、〈モダン層によるモダン相〉が出現した社会でもあったと言われている。⁸⁾ さて、関東大震災は東京に壊滅的な打撃を与えたが、同時それは日本人の思考・行動様式の上で価値観の転換をもたらす契機にもなったと言われる。

長岡輝子の回想記『父からの贈り物』によれば、震災時、女学生であった主人公は万事に積極的な行動をとっていたがために、〈新しい女〉という意味で震災後というレッテルを貼られたと言及している。⁹⁾

では、谷崎自身はこの関東大震災をどう受けとめていたのだろうか。『かの大震災の折り、自分が助かったと思った刹那横浜にある妻子の安否を気遣うたけれども、殆ど同じ瞬間に「しめた、これで東京がよくなるぞ」という歓喜がわいてくるのを、如何ともし難かった」¹⁰⁾ というように、横浜に残してきた妻子の安否を気遣いながらも震災後の東京が近代都市化していくのを想像し、それに伴って風俗習慣の変革をも期待したのである。つまり、谷崎にとって関東大震災は伝統的風俗習慣を一拭して、「もう彼女たちは畳の上に坐ったり、帯で胴体を締め付けたり、思い平べったい木の穿き物を引き摺るような事はないだろう。そして彼女たちは肉体が健やかに発育を遂げた頃には、家庭に、街頭に、競技場に、海水浴場に、当時代の日本が夢想だにもしなかった女性美が見られるであろう。それは殆ど人種が違ってしまったような変化であり、姿も、皮膚の色も、眼の色も、西洋人臭いものになり、彼女たちの話す日本語さえが欧州語のひびきをもつであろう。」¹¹⁾ というように1920年代の都市文化社会にふさわしい女性像を空想していくのである。さらに「私の求めるのは、生き生きとした眼と、快活な表情と明朗な音声と、健康で均整のとれた体格と、そして何よりも直っすぐな長い脚と、ハイヒールの沓がびったり納まる爪の尖った可愛い足と、要するに、外国のスタアの肉体と服装を備えた婦人」像の模索といったように、『痴人の愛』の女主人公ナオミはこうした背景から描写される女性像であったと思われる。ここでは関東大震災を契機として出現し、都市化社会に順応していく女性像として描かれるナオミの身体についての展開を試みる。

さて、本論は『痴人の愛』を作品論のレベルで何か新しい解釈を試みようとするものではない。本論の目的はあくまでも作品を構成する女主人公ナオミの身体像を追究することによって、大正後期社会における身体像を描いてみたいのである。それは、やがてモダニズム文芸と身体・スポーツとの係わりを追究するための大雑把な予備的試みでもある。

2: 西洋崇拝と身体

谷崎の西洋に関する理解・把握についての批判は今日では定説化されていると言われている。¹³⁾ しかしながら、『痴人の愛』を書く頃の谷崎は熱烈な西洋崇拝者であり、彼の初期の諸作品にも西洋崇拝の熱を感じさせるような描写がいたるところに散在するのである。ここでは谷崎の西洋崇拝が何を物語るものであったのか、また、その西洋崇拝と係わっている〈白〉という色彩に対する異様なまでのこだわりが何を意味するものであったのかを追究しながら、身体との係わりについて探ってみたい。「わたしは自分の胸の中に燃えている痛切な芸術上の欲求が、到底現代の日本に生まれて日本人に圍繞——されて居ては、満足されるものではないことを発見した。

————— 私は俄然として、激しい西洋崇拝熱に襲われ始めた。————— 私は人間が神を仰ぐやうに西洋を見ずには居られなくなった。」¹⁴⁾ この〈激しい西洋崇拝熱〉にとりつかれた〈私〉とは谷崎自身のことと思われる。では谷崎を捉えた〈西洋〉とは何であったのか。「————— あゝ己は西洋に行きたいな。あんな荘厳な、堂々とした婦人の肉体を見る事の出来ない国に生まれたのは己の不幸だ。芸術が何だ、文学が何だ、こんなちっぽけな体格と、ほんやりとした色彩と、浅薄な刺戟しかない日本に居ながら、立派な芸術なんか出来るもんか。————— 」¹⁵⁾ というように、この作品中の『饒太郎』の西洋への憧憬は〈堂々とした婦人の肉体〉であり、それは主人公の〈ちっぽけな体格〉と対置されて語られていくのである。「「あゝ西洋へ行きたい。西洋へ行きたい。立派な体格を持った西洋人に生まれなかったのは僕の第一の不幸だ。」其時分、彼の西洋崇拝熱は異常に旺盛になって、一しきり「日本の物は何でも嫌いだ」などと言いました。」¹⁶⁾ この作品の中で友人に語らせる西洋崇拝熱も谷崎自身のことと思われる。そしてここでも西洋の崇拝が〈立派な体格を持った西洋人〉への憧憬であり、それは〈芸術と体育〉との係わりで語られていくのである。さて、「泥濘と、悪道路と、不秩序と、陰悪な人情の外何物もない東京」¹⁷⁾、この雑然たる東京が「いっそ大火事でもあって、ある五味溜めを引っくり覆したような町々が鳥有に掃ってしまったらいい。」¹⁸⁾ というように、東京がつまらないと感じていた谷崎にとって関東大震災は〈歓喜が湧いて来るのを如何ともし難った〉ほど、それに伴う風俗習慣の変革を想って〈種々な幻影〉を描いていくようになるのである。しかもそれが西洋流の奢侈逸楽といった幻想であっても、〈何事も西洋を模範とする日本〉であれば、必ず日本が夢想だにしなかった女性美の出現という夢を描いていくようになるのである。¹⁹⁾ 「精神にも《崇高な精神》と言うものがある如く、肉体にも《崇高なる肉体》と言うものがある」²⁰⁾ こうして谷崎はこの〈崇高なる肉体〉

を持った女性を西洋人に求めていくのであるが、それはまた『のびのびと発達した子馬のような手足の肉がやがてその「似合わない」和服を脱いで、—— 踵の高いきゃしゃな靴先でしなしたと街を通る西洋人のようになった姿を空想』していくように、²¹⁾ 谷崎の西洋崇拜が基本的には西洋人の身体に対する憧憬であり、そして「女性と言うものに対しては、ずっと前から或理想を持っていた」²²⁾ というように、「堂々たる体格の西洋人」とは「白皙の人種の婦人」であり、『痴人の愛』で具体的に描写されているシュレムスカヤ夫人の「白い手」であった。『ナオミの手だって、しなやかで艶があって、指が長々とほっそりしていて、勿論優雅でないことはない。が、その「白い手」はナオミのそのやうにきゃしゃ過ぎないで、掌が厚くたっぷりと肉を持ち、指もなよ々と伸びていながら、弱々しい薄ッぺらな感じがなく、「太い」と同時に「美しい」手だ。—— そして何よりもナオミと違っていたところは、その皮膚の色の異常な白さです。』²³⁾ このシュレムスカヤ夫人こそは「白」の体現者であり、それはナオミの「きゃしゃな手」と違って「太く」、「美しい」手であり、そして「皮膚の色の異常な白さ」は、腋臭さえも「婦人の白い体から放たれる香气」と感じとってしまうほどであった。では、このように谷崎が西洋人女性の身体の崇拜へと傾注していくその「白」への憧憬は何であったろうか。「私は白を此の世の中の何物にも優る貴いものと崇拜した」²⁴⁾ と言うように、谷崎にとって「白」は優雅、武勇、智慧、品格を象徴する概念として、それは「赤」と対比させながら「白」をあらゆる美德の象徴として捉えていくのである。そして谷崎にとってこの「白」を崇拜する感情は「或一つの完全な美の標的、まあ、強いて名づければそうでも言うより外になかろう」²⁵⁾ と言うように、それは西洋人女性の「堂々たる身体」の美の象徴と見立てていたように思われる。であれば『痴人の愛』において西洋人のように仕立てられていくナオミの身体はその「白」への転化であり、そのための教育が開始されていくようになるのである。ナオミの身体は主人公の西洋崇拜熱の基底にある「白」が持つと思われた諸徳性を具現化していくような身体として仕立てられていかなければならなかったのである。しかし、それは主人公や井上菊子のような伝統的な身体の否定に連なっていくのである。

3. 日本人の身体の自己否定

『痴人の愛』の主人公によるナオミの身体像に象徴される西洋的なものへの崇拜は、ひたすら日本の伝統的な文化との比較であったと思われる。『幼い頃から西洋人の女の多くをみついていたせいでもあろう、「女」とい

ふと彼には純白の皮膚を持った、金色の髪をちぢらせた、聖母のやうな気高い碧い瞳を持った荘厳な顔が眼に浮かんだ。彼の「女」はそれ以外になく、彼女は彼の美しい夢の世界にすんでいた。—— しかし、黄色い皮膚を着せられている日本人の彼が、それをどうすることが出来よう。彼は此処でもあきらめをもたねばならなかった。さうして彼のそのあきらめは、反対に、日本人の女に対する反感と嫌悪になった。」²⁶⁾ このように、主人公が西洋人の女性を崇拜するように、行動様式を構造化する文化コードの差異はナオミの身体技法にも反映されているのである。

ここではまず、谷崎による西洋人の美と日本人の美における「身体技法」の比較を試みることにする。「日本橋の家の奥でかすかな庭の明かりをたよりに針仕事をしていた母の姿を考えると、昔の女がどういう風なものであったか、少しは想像出来るのである。—— 母は至って背が低く、五尺に足らぬほどであったが、母ばかりでなくあの頃の女はそのくらいが普通だったのであろう。いや極端に言えば、彼女たちには殆ど肉体がなかったのだと言っている。私の母の顔と手の外、足だけはほんやり覚えているが、胴体については記憶がない。

—— が、昔はあれでよかったのだ。闇の中に住む、彼女たちにとって、ほのじろい顔一つあれば、胴体は必要なかったのだ」²⁷⁾。女性美の標準のことばかりしか考えなかった谷崎は、伝統的文化コードによって培われた身体技法が、身体の西洋化志向が庶民一般にまで広がっていく大正後期社会にあって想像することすら困難になってきている事を指摘しながら、都市化社会と調和するような西洋化した身体像を求めていくのである。「古い長い伝統を背負う日本の女性を西洋の女性の位置にまで引き上げようと言うのには、精神的にも肉体的にも数代のジェネレーションにわたる修練を要するのであって、これがわれわれ一代の間に満たされよう筈はない。早い話だが、まず西洋流の姿態の美、表情の美、歩き方の美である。—— 西洋には遠くギリシャの裸体美の文明があり、—— 女性が真に彼らと同等の美を持つためには、われわれもまた彼らと同じ神話に生き、—— 数千年に遡る彼らの美術をわれわれの国に移し植えなければならぬ。」²⁸⁾ と言うように、谷崎は日本人女性の身体と西洋人女性の身体との比較を伝統的文化コードの差異に帰しながら、ナオミを通して日本人の身体の西洋化を展開していくようになるのである。しかも、それは日本人の伝統的な身体技法の否定となって展開されるのである。このことは『痴人の愛』の中のいたるところに散在しているのである。つまり、「何しろ背が五尺二寸という小男で、色が黒くて、歯並びが悪くて、あの堂々たる体格の背容人を女房に持たうなどは、身の

程を知らな過ぎる。」²⁹⁾ というように、主人公の〈身長
の低いこと〉、〈色が黒いこと〉、〈歯並びが悪いこと〉
とに象徴される主人公の、日本人としての典型的な身体
を自己嫌悪的に強調しながらそれは西洋人の〈堂々たる
体格〉に対する劣等感に転化されていくのである。と
ころで、「顔はと言ふと、頬っぺたが赤く、眼が大きく、
唇が厚く、そして何処までも準日本式の、浮世絵にでも
ありそうな細長い鼻つきをした瓜実顔の輪郭でした。

————— 思ふに此の女は、自分の顔があまり日本人
過ぎるのを此の上もなく不幸に感じて、成るだけ西洋臭
くしようと苦心惨憺しているらしく、よくよく見ると、
凡そ外部の露出している肌と言う肌には粉が吹いたやう
にお白粉が塗ってあり、眼の周りにはペンキのやうにぎ
らぎら光る緑青色の絵の具がほかしてあるのです。

————— 」³⁰⁾ ダンス・ホールに登場する実業家の
娘の井上菊子もまた、日本人的な身体の持ち主として描
写されていく。特に身体の加工という化粧も、不用意す
ぎるほど西洋人を無自覚に模倣することの滑稽さは、
「ニッポンもニッポンも、純ニッポン」と、西洋人的な
身体への努力がここでは「猿の悲しき努力」と笑嘲され
ていくのである。

さて、『痴人の愛』の主人公や井上菊子のような典
型的な日本人の身体は、都市化によって西洋化が進む大
正後期社会にあっては否定的に捉えられていくのである
が、それは常に西洋人の身体と比較される傾向を持って
いたのである。たとえば、福島県体育主事・富田彦三郎
は日本人女性の体型や姿勢の悪さは伝統的な文化コード
に依拠するものであることを強調していくのである。

「徳川時代に於ける女子道徳を最もよく現したものは貝
原益軒の女子大学である。その内に七法と言うことを説
いて居る。————— その様な堅苦しい、偏屈な思想
が悪影響を及ぼして女子の体質が悪くなったと思われま
す。」³¹⁾ このように富田は、日本人女性の身体的な欠
点が伝統的な道徳規範に拘束された女性観に起因してい
ると指摘しながら、「古来わが国では、立てば芍薬坐れ
牡丹歩む姿は百合の花と言った様な女子の美を花に例え
て居ります。雨にぬれたる海藻といった様なナヨナヨと
した吹けば飛ぶ様な姿を良いとして賞賛されたのであり
ます。————— 古来から日本人は美を顔に求めて体
全体を見ないのであります。」³²⁾ 彼は日本女性の美の
規準が西洋的な〈動美〉に対して〈静美〉にあったこと
を指摘しながら、日本女性の身体の改善にあたって女性
美の規準の確認、さらには生活様式の改善にまで言及し
ていくのである。「それから着物である。これも裾が長
く足にからまって敏活な動作が出来ない。彼の大正12年
震災の時日本人はこの着物が原因して非常に焼死者を出
した」³³⁾、というように富田は関東大震災のとき女性

の行動を制限した着物へも言及しているのである。彼は
このように伝統的価値観による拘束が日本人女性に対し
て身体技法上の悪さをもたらしたと指摘しながら、「西
洋人は立派である。活発である」とか、「外国の婦人は
美容体操といふて、身体の曲線美と言う事に色々と工夫
をこらしてやって折られます。」³⁴⁾ というように、彼も
また日本女性の身体を改善するためのモデルを西洋人女
性に求めていくのである。

このような富田の見解は彼自身だけの考えではなかつ
たろう。しかも彼の主張が昭和初期という時代的な制限
はあっても、『痴人の愛』が舞台となった大正後期社会
でもそれは同様であったと思われる。つまり、西洋人の
身体を理想のモデルとする考えは大正後期社会には一般
にも浸透していたように思われる。「日本人は背が低い
足が短い。かう言われていた時代はもはや昔と思われ
る位今ではピッタリ型についた洋服、そしてなだらかな脚
線の美しさ、そこには外人にも劣らぬ程整った体格の人
を見る事ができます。————— 併し振り返って他を見
る時それは極く少ない一部の人のみではないでしょう
か。背の低い足の短い人々が醜い格好でチョコチョコと
小路などから出て来るのをどんなに多く私達は見かけ
るでせう。其所此所の町角などで少し体格がいいなと思
う人々は、大抵大学生あがりか、又学生ばかりです。そし
て日本人は外国人に比べて快活さ明るさがないと言つても
好いやうです。————— チメチメと何時も日当たり
の悪い都会の汚い路地のやうにおしちぢめられて日光に
浴しない、運動を念頭におかぬ陰気な生活が身体や精神
上にも影響するのでせう。淋しさうに小さくかがんで気
兼さうな姿をしています。」³⁵⁾ この高岡高等女学校四
年生の富田富子もまた、古くて、陰気な日本人の身体、
身体技法の醜さといったものを指摘しながら、それは西
洋人との比較で語られていくのである。こうした富田自
身にも理想的で快活な身体を持つものとして、〈西洋人
の身体〉像といったものが潜在的背景にあったように思
われる。大正後期社会、西洋人的身体への憧憬は日本人
の身体が劣っているという認識、つまりこの認識こそ日
本人の身体そのもの否定に連なるものであったように思
われる。こうして、ハイカラな、都会的な身体像を求め
ていくために『痴人の愛』のナオミも伝統的な身体技法
を取り払って、西洋人的な身体を構築するために仕立て
られていくのである。

4. ナオミの〈白〉への体現化

社会一般において理想化される身体と否定される身体
といったような、いわゆる〈表現される身体〉は社会構
造を維持していく装置としてのイデオロギー的側面をも

つと言われる。。つまり、身体は社会コードを纏った号でもあると思われる。

さて、近代化過程において日本人の身体矯正は西洋的
身体技法の習得を意味していたと思われる。「痴人の愛」
の主人公によるナオミの身体の西洋化は、都市化社会に
順応していくための身体の再秩序化へのプロセスでもあつ
たと思われる。「あゝ、勉強おし、勉強おし、もう直ぐ
ピアノも買って上げるから。さうして西洋人の前に出て
も恥ずかしくないやうなレディにおなり、お前ならきつ
となれるから。」³⁶⁾、「一方では又、彼女を十分に教
育してやり、偉い女、立派な女に仕立てようよ ——
近代的な、ハイカラな婦人」³⁷⁾に仕立てるために、
ナオミの身体の西洋化はまず品格の教育から開始されて
いく。それは近代社会にあつて〈白〉を具現化していく
ための作業でもあつたと思われる。そして、それは谷崎
自身の西洋崇拜感覚の総決算として展開されていくもの
であつたと言われている。

さて、主人公によるナオミの身体の西洋化が開始され
る前に、ナオミ自身のことに触れておきたい。まず、ナ
オミは〈自分の娘や妹の貞操と言うことに就いては問題
にしていない〉生活環境にありながら、主人公に何か学
問をする気がないかと問われて、〈わたし、英語が習い
たいわ〉とか、〈それから音楽もやってみたいの〉と即
座に返答したり、「花の話して想ひ出すのは、彼女が大
変西洋花を愛していて、———— それも面倒な英語の
名前を沢山知っていたことでした。」³⁸⁾ というように、
ナオミ自身も漠然とはあるが西洋志向を持っていたよう
に思われる。こうして主人公の西洋崇拜熱とナオミの
西洋志向は、ナオミの〈白〉への体現化を展開していく
うえでその両輪ともなっていくのである。さて、ナオミ
の身体の西洋化は谷崎自身の西洋崇拜熱の具現化を目指
して展開されていく。〈ナオミちゃん、お前の顔はメ
リー・ピクフォードに似てるね〉と言うように、まずナ
オミの西洋人的な顔立ちからはじまって、「ナオミよ、
ナオミよ私のメリー・ピクフォードよ、お前は何と言ふ
釣り合いの取れた、いい体つきをしているのだ。お前の
そのしなやかな腕はどうだ。その真直ぐな、まるで男
の子のやうにすっきりとした脚はどうだ」³⁹⁾。主人公
は、〈ナオミが15才の8月、どう言う風な体格だったか、
一通りここに記して置かなければなりません。〉という
ように、まずナオミと出会った当時のナオミの身体の特
徴をとくとくと描写していくのである。それは〈胸が短
く〉、〈脚の方が長く〉といった具合に、まずナオミの
身体の西洋人臭さの強調から始まり、さらにはナオミの
西洋人臭さは〈歯の並びのせい〉でもある、というよう
に歯並びもまた西洋人臭さを象徴するナオミの身体の特
徴として描写していくのである。「近来都会人の歯は日

増しに美しくなつて昔のような乱杭歯や八重歯や茄子歯
はめっきり少なくなつた。男女を問わず、礼儀や容姿に
気を付ける人は、歯研き一つにしてもコリノスだとかペ
ブノデントだとか、アメリカの舶来品を使って、念の入つ
たのは朝夕二度も歯を研ぐ」⁴⁰⁾、このように大正後期社
会における新しい生活感覚を持っていたと思われるナオ
ミの身体について、主人公はナオミが〈アメリカ人に近
く、文明人〉としての身体技法を身につけていたことを
強調しながら、さらにナオミの身体的描写は続くのであ
る。「かう言う体格を持っていた彼女が、運動好きで、
お転婆だったのは当たり前だと言わなければなりません。
実際ナオミは手足を使ってやることなら何事に依らず器
用でした。水泳など鎌倉の三日を皮切りにして、あとは
大森の海岸で毎日一生懸命に習つて、その夏中にとつと
う物にしてしまひ、ボートを漕いだり、ヨットを操つた
り、いろんな事が出来るようになりました。」⁴¹⁾ とい
うように生来西洋人臭さを持っていたナオミの身体は、
さらには運動が好きで活発な身体をもっており西洋人的
な身体技法を次々と習得していくようになるのである。
次にナオミの身体は日本的属性の象徴である着物を纏つ
た日本的身体から、洋服を纏つた西洋的身体へと変容を
とげていくようになるのである。「何しろお前は日本人
離れがしているんだから、普通の日本の着物を着たんじゃ
面白くないね。いっそ洋服にしてしまふか。此からの女
はだんだん活発になるんだから、今迄のやうな、あんな
重苦しい窮屈な物はいけなと思ふよ。」⁴²⁾ このよ
うに西洋人臭い身体を持ち主であつたナオミの身体は、
さらに主人公の西洋的感覚のもとであらゆる本格的な西
洋的身体へと仕立てられていくようになるのである。し
かし、〈みんながわたしを、すっかり変わったって言つ
てたわ〉、〈恐ろしくハイカラになつた〉と言われるよ
うになつてきたナオミの身体も階級的身体というものを
即座に払拭できたわけではなかつたのである。「横須賀
の二等室へ乗り込んだ時から、私たちは一種の気後れに
襲はれたのです。———— こうして彼等とナオミとを
比べて見ると、社会の上層に生まれた者とさうでない者
との間には、争はれない品格の相違があるやうな気がし
たのです。———— 氏や育ちの悪い者は矢張どうして
も駄目なのぢやないかと、———— そしていつも彼女
をハイカラに見せたところの、あのモスリンの葡萄の模
様の単衣物が、まあその時はどんなに情けなく見えたこ
とでせう。」⁴³⁾ ここではナオミが今までの生活環境の
もとで身につけた身体技法そのものに染み込んでいる階
級性というものは簡単には克服することができないこと
を指摘しているのである。しかしながら、主人公はナオ
ミを大正後期社会に通用するような女性に仕立てていく
ために、つまり、ナオミを西洋人にも劣らぬ教養豊かな

女性に教育して、何処へ出しても恥ずかしくない〈近代的な、ハイカラな婦人〉に仕立てていこうとするが、主人公とナオミのハビトウスの相違は西洋志向の対立へとなっていくのである。「ナオミちゃん、遊びは遊び、勉強は勉強だよ。」⁴⁴⁾とか『女の児だつて、成るほど今までは解剖的の頭がなくても済んでいた。が、此れからの婦人はさうはいかない。まして、「西洋人にも劣らないやうな」「立派な」女になろうとするものが、組織の才がなく、分析の能力がないと言うのでは心細い』⁴⁵⁾。主人公にとって、この語学教育をめぐるの〈ハビトウスの身体化方式〉⁴⁶⁾の対立はナオミを〈精神と肉体の両面から美しくしようとした〉試みが無駄であったことを痛感するようになっていくのである。「ナオミは自分の期待したほどの賢い女ではなかったこと、やっぱり育ちの悪い者は争はれない、千束町の娘にはカフェの女給が相当なのだ、柄にない教育を受けたところで何にもならない——」⁴⁷⁾こうして教養豊かな品格を持った西洋人へ近づくための勉強にしてもナオミの身体に浸っている下層階級のハビトウスを矯正することが困難であることを悟っていくのである。しかし、精神面での教育については主人公の期待を裏切りながらも、「肉体の方ではいよいよますます理想通りに、いやそれ以上にナオミの肉体は美しさを増して行った」⁴⁸⁾のである。『私は特に「肉体」と言います。なぜならそれは彼女の皮膚や、歯や、唇や、髪や、瞳や、その他あらゆる姿態の美しさであつて、決してそこには精神的の何もなかったのですから。』⁴⁹⁾。この精神と身体との背反に接して〈近代的で、ハイカラな婦人〉になるためのナオミの教育は断念しなければならなかった。しかし、ナオミの身体はこうした一切の精神性が除去されてはじめて大正後期社会に象徴されるような、いわばモダニズムを生きるような時代的体として形成されていくのである。『私は今迄ナオミの手をおもちゃにしながら、「お前の手は実にきれいだ、まるで西洋人の手のように白いね」と、よくそう言って褒めたものですが、斯うして見ると、残念ながらやっぱり違ひます。白いようでもナオミの白さは冴えていない、いや一旦この手(シュレムスカヤ夫人の手)を見たあとではどす黒くさえ思はれます。』⁵⁰⁾ ()内は筆者

主人公が西洋崇拜熱に浮かれて、その具現化を押し進めるために追究した〈白〉をナオミは体現していない。むしろ精神と身体の両面から西洋化を願っていた主人公の教育から逸脱していくようになるナオミの身体は、シュレムスカヤ夫人の身体と相対化されるかたちで大正後期社会に出現してくるような身体像として描写されていくようになるのである。その具体的な例がソーシャル・ダンスを習得していく場面であつたと思われる。ナオミにとつ

てこのソーシャル・ダンス、つまりこの新しい身体技法の習得こそは西洋人に近づくための手段でもあつた。「ダンスを習ふのも悪くはなからう。もはやナオミも三年前のナオミではない」⁵¹⁾しかし、大正後期社会にあつてソーシャル・ダンスは庶民化しつつあつたとはいえ、まだ一般的には白眼視されていたのである。「要するにまだ世間ではソーシャル・ダンスと言ふものゝ意義を諒解していない。男と女が手を組み合つて踊りさえすれば、何かその間に良くない関係があるもののように憶測して、直ぐさう言う評判を立てる。新時代の流行に反感を持つ新聞などが、又いゝ加減な記事を書いては中傷するので、一般の人はダンスと言へば不健全なものだと極めてしまつている」⁵²⁾。しかし、主人公はこのソーシャル・ダンスを通して西洋人臭いナオミの身体を西洋化していこうとするが、それは逆に白人の粹を集約したようなシュレムスカヤ夫人の身体技法との相対化を強調していく結果になっていくのである。『私が西洋の婦人と握手する「光栄」に浴したのは、その時が生まれて初めてゝした。私はシュレムスカヤ夫人がその「白い手」を私の方へ差し出したとき、覚えず胸をどきッとしてそれを握つていゝものかどうか、ちょっと躊躇したくらいでした』⁵³⁾。主人公にとって〈白〉は西洋崇拜の中核をなすものであり、〈白哲人種の婦人〉のシュレムスカヤ夫人の「白い手」こそはその象徴であつた。それに対してナオミの手は〈どす黒く〉さえ思えてくるようになるのである。また、同様に〈五尺二寸の小男〉、〈色が土人のように黒く〉、〈乱杭歯であること〉といった主人公の伝統的な身体は、それが日本人的な身体を象徴するものとして、かえつて〈白〉の優越性を強調することになっていくのである。さて、ナオミの身体西洋化への失敗は、それが女優綺羅子の身体技法と相対化されていくことで明らかになっていく。「ナオミは為る事成す事が活発の域を通り越して、乱暴過ぎます。—— ややもすると下品になります。』⁵⁴⁾というようにナオミの野性的な身体に対して「此れに比べると綺羅子の方は、物の言ひよう、眼の使ひよう、頭のひねりやう、手の挙げやう、全てが洗練されていて、注意深く、神経質に、人工の極致を尽くして研きかけられた貴重品の感がありました。』⁵⁵⁾というようにこのナオミと綺羅子の身体技法の違いを主人公は、〈野生的身体〉と〈洗練された身体〉、あるいはナオミが〈メリー・ピクフォードでヤンキー・ガール〉であるとすれば、綺羅子の方は〈伊太利かフランス〉人のように〈しとやかさ〉を纏つた身体に例えていくのである。このように、ナオミの身体がシュレムスカヤ夫人の身体や綺羅子の身体との差異が明らかになされていくとき、ナオミの身体は〈白〉に転化しえない身体、つまり、西洋かぶれの浅薄な身体として描写さ

れていくのである。しかしながら、このように精神的な支えを持たないナオミの身体こそは、大正後期社会に出現してくる「モダン相」を反映するような身体ではなかったろうか。とすると、『痴人の愛』のナオミの身体こそは今までに見られなかった身体像を提供していくものであったように思われる。

5. スポーツする身体

谷崎の諸作品には身体及びスポーツについての描写が多数散在する。ここではこれらの描写を時代状況を知る手がかりとしながら、また『痴人の愛』のナオミの身体が大正後期社会の社会的身体像として描き出されていく、その時代背景として捉えていく。

さて、関東大震災がもたらした物理的变化はそれに並走するかたちで都市社会化していく社会の諸事象にも変化が見られるようになってくる。この時期に社会的広がりを見せていたスポーツも心身の鍛錬というよりも、国際的な競技会への参加を契機として勝敗や記録が問題視されてくるようになる。『スポーツを「楽しむ」という行為は、武の国の住人にはなかなか難しい芸当である。何に対してもすぐに「道」の概念をつけ加えたがる日本人は、国際大会で「世界」との力量の差を知り、俄然、スポーツの神髄は「記録」にあり、という概念にとりつかれる』⁵⁶⁾。事実、大正13、14年と続く第8回オリンピック大会と第7回極東選手権大会は日本のスポーツが大正後期から昭和初期にかけて、まさに国を挙げて活況を呈していくその契機ともなったのである。⁵⁷⁾ こうした時代を反映するかのように、谷崎自身も彼の諸作品の中に当時のスポーツや体育についての描写を試みているのである。『彼は折々学校の運動家の群に投じて見ようとするがあった。するといたづら好きな運動家の連中は「聖人がテニスを始めた。」「瀬川ガボールをやって居る」などと言って手を打って嘲笑した。———彼が三年級になった年から、機械体操と撃剣とが必修科目として科せられたが———』⁵⁸⁾。この自伝的作品と言われる『神童』の主人公が体験したようなことは当時、学校体操教授要目によって学校体操が整備されていく状況を描写しているものと思われる。また、『痴人の愛』でナオミの身体が描写されていく舞台にはスポーツが社会的に広がりを見せていた時期と重なるのである。その対象は社会人や女性の間にも広がりを見せて普及していったのである。このような状況は谷崎自身も『旅のいろいろ』において、「昨今は、夏は山登り、冬はスキー、肺病患者にも紫外線などと言って、とかく山が持て囃される。わたしなんぞつい眼と鼻の甲子園のスタンドさえ覗いたことがないくらいで、スポーツのことは一向

疎いのであるが、冬になると各地のスキー場の積雪の量が日々沿線の各駅に貼り出されるし、ラジオでも放送されると言う有様を見てはどうしてあんなことにそんな大騒ぎをする価値があるのかと、訝しまざるを得ないのである。』⁵⁹⁾ と言うようにスポーツが今やモダン・ライフに欠かせない要素であったことを指摘しているのである。さて、大正後期社会には日本女子体育協会（大正13年）が結成されたり、1926年には日本女子スポーツ連盟が誕生したり、この時期の女子教育の普及とともにスポーツにおいても女子の進出が盛んになってくるのである。

「己が精神修養を忘れぬ為、又大に自己肉体の筋肉調整に努力し、其姿態運動のうちに、優美性を表現せしめねばならぬ」⁶⁰⁾ と言うように、この当時は女性の健康的な身体の賞賛が広がりを見せていくようになる時代であるが、こうしたことは海水浴やテニスなどのスポーツの流行をもたらしていくようになる。特に海水浴については風俗的な面から批判の対象になっていたが、スポーツの流行は水泳をも奨励していくようになるのである。

「日本は島国だから海に親しめなんととかいふ、議論もはやとつくに昔に過ぎ去ったではありませぬか。今は実行の時代であります。進取の気象に富む、今後の日本女子は、其美容健康法としても、護身用としても、適當の注意の下に水泳を練習してみられんことを、おすすめ致します。」⁶¹⁾

さて、『痴人の愛』が舞台となる大正後期社会において、モダンガールという言葉が定着していくようになる。前田によると、この頃に若い女性を対象に実施された婦人雑誌のアンケートによると、好きなスポーツにテニス、水泳、ピンポン、ダンス等が挙げられている、と指摘している。⁶²⁾ こうした状況は『痴人の愛』のナオミが西洋的身体を目指していた頃と重なってくるように思われる。ナオミの身体はまさに大正後期社会の若い女性像を反映するような、そんな身体像でもあったと思われる。

暫定的結語

主人公の西洋的感覚で西洋化されていくナオミの身体像の大雑把な追究を試みてきた。さて、大正後期社会における都市化の展開は日常の生活感覚をも変容させていくようになったと言われている。それは伝統的な「坐る文化」から「動く文化」への変化と言われている。⁶³⁾ こうして活発であることが重視されてくるようになると、女性の価値観も大きく転回を余儀なくされてくるようになる。つまり、伝統的規範からの開放の流れは「モダン層」をつくりだし、モダン・ライフを展開していくようになる。⁶⁴⁾ また、こうした女性の活動的な行動と不可

分な関係にあったと思われる学校教育においても、女生徒の間でスポーツ活動が盛んになっていくのである。ナオミの身体の西洋化はこうした時代を背景にして、いわゆる大正後期社会の社会的身体像として描写されていくのである。しかし、主人公が理想とする身体像とは違ってナオミの身体は、西洋人女性によって象徴されるような身体とは対比的に、常に何らかの欠点を持った身体として描写されていくのである。その欠点とは何であったか。それは〈白〉に象徴される崇高な身体とはかけ離れた、物質のみの身体という、それは漠然と西洋かぶれの浅薄な身体ということであったように思われる。しかしながら、主人公はそのナオミの身体像に時代的身体像をみていたようにも思われる。一般的に社会化された身体が社会構造を維持していくその装置として働きかける記号を持つとすれば、『痴人の愛』が舞台となる大正後期社会にあってナオミの身体像こそはまさにモダンガール像としての身体として、それは時代的精神を纏った身体として描写されていたように思われる。

本研究は、平成11年度の基礎教育系の研究費（重点配分）の援助を受けました。

引用・参考文献

- 1) 阿部知二：スポオツ小説のこと、「文学風景」、P.34、昭和5年12月号
- 2) 石井洋次郎：身体小説、P.141、藤原書店、東京、1998。本研究が、上記の文献に依拠しながら展開されていることを付記しておく。
- 3) 保昌正夫：大正文学から昭和文学へ、「昭和文学全集・別巻」、P.271、小学館、東京、平成2年。
- 4) 川口 喬：文学の文化研究、P.3、研究社出版、東京、1995。
- 5) 中村三春：流通する身体、「講座昭和文学史・第1巻」、P.129、有精堂、東京、1998。上記の論文は必ずしも『痴人の愛』を対象とするものではないが、身体、特にスポーツと社会との係わり方を論じている。特にモダニズム文芸とスポーツとの係わり方については、大いに示唆を受けたことを付記しておく。
- 6) 神内秀信：日本都市文化の特質、「近代日本文化論・5」、P.10、岩波書店、東京、1999。
- 7) 谷崎潤一郎：痴人の愛、「谷崎潤一郎全集・第10巻」、P.3、中央公論社、東京、1995。
- 8) 大宅壮一：モダン層とモダン相、「昭和文学全集・第33巻」、P.264、小学館、東京、平成10年。
川本三郎：モダン都市の変貌のなかで、「近代日本文化論・5」、P.8～9、岩波書店、東京、1999。
川本によれば、大正後期社会になって消費型人間の出現が見られ『痴人の愛』のナオミは消費三昧の生活を送る徹底した消費人間であり、映画、ダンス、スポーツとモダニズムを生きるモダン層に属する女性であったと指摘している。
- 9) 長岡輝子：父からの贈り物、P.12～13、草思社、東京、1984。
- 10) 谷崎潤一郎：東京をおもふ、「谷崎潤一郎全集・第21巻」、P.12～13、中央公論社、東京、1995。
- 11) 谷崎潤一郎：全集第21巻、P.15。
- 12) 谷崎潤一郎：全集第21巻、P.11。
- 13) 前田久徳：谷崎潤一郎物語の生成、P.70、洋々社、東京、2000。
- 14) 谷崎潤一郎：獨探、「谷崎潤一郎全集・第3巻」P.233、中央公論社、東京、1992。
- 15) 谷崎潤一郎：饒太郎、「谷崎潤一郎全集・第2巻」、P.458、中央公論社、東京、1990。
- 16) 谷崎潤一郎：金色の死、「谷崎潤一郎全集・第2巻」、P.486、中央公論社、東京、1990。
- 17) 谷崎潤一郎：全集第21巻、P.13。
- 18) 谷崎潤一郎：全集第21巻、P.12。
- 19) 前田久徳：前掲書、P.73。
- 20) 谷崎潤一郎：恋愛と色情、P.54、岩波文庫、東京、1998。
- 21) 谷崎潤一郎：青い花、「谷崎潤一郎全集・第8巻」、P.229～300、中央公論社、東京、1992。
- 22) 谷崎潤一郎：肉魂、「谷崎潤一郎全集・第9巻」、P.22、中央公論社、東京、1995。
- 23) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.83。
- 24) 谷崎潤一郎：アヴェ・マリア、「谷崎潤一郎全集・第8巻」、P.592、中央公論社、東京、1992。
- 25) 谷崎潤一郎：全集第8巻、P.596。
- 26) 谷崎潤一郎：全集第9巻、P.22。
- 27) 谷崎潤一郎：全集第20巻、P.544～545。
- 28) 谷崎潤一郎：全集第20巻、P.255。
- 29) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.82～83。
- 30) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.111～112。ポーラ文化研究所編：モダン化粧史、P.38～39、ポーラ文化研究所、東京、1998。によれば、『痴人の愛』における井上菊子の描写は大正後期社会の女性の間で、頬紅が健康的な美しさを表現するものとして流行したこの証左であったと思われる。
- 31) 富田彦三郎：女子体育に就いて「国民保険体操講演集(2)」所収、P.86～87、簡易保険局、1929。

- 31) 富田彦三郎：女子体育に就いて「国民保険体操講演集(2)」所収、P.86~87、簡易保険局、1929.
- 32) 富田彦三郎：前掲書、P.87.
- 33) 富田彦三郎：前掲書、P.89~90.
- 34) 富田彦三郎：前掲書、P.92.
- 35) 富田富子：健康美の黎明、「国民保険体操を語る」所収、P.63~64、簡易保険局、1930.
- 36) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.43.
- 37) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.48.
- 38) 谷崎純一路：全集第10巻、P.19.
- 39) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.34.
- 40) 谷崎潤一郎：全集第20巻、P.229~300.
- 41) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.36.
- 42) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.44.
- 43) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.31.
- 44) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.48.
- 45) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.53.
- 46) 石井洋次郎：前掲書、P.168.
- 47) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.58.
- 48) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.58.
- 49) 谷崎純一路：全集第10巻、P.58.
- 50) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.84.
- 51) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.70.
- 52) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.157.
- 53) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.83.
- 54) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.117.
- 55) 谷崎潤一郎：全集第10巻、P.117.
- 56) 新青年研究編：新青年読本・昭和グラフィティ、P.75、作品社、東京、1988. 本雑誌には大正後期から昭和初期にかけてのスポーツに関する記事が多数掲載されており、この時期のスポーツの状況を知る重要な手がかりとなるものと思われる。その草稿は大部分手許に整えてあるが、別稿で記すつもりである。
- 57) 加賀英雄：わが国における太平洋戦争への道とスポーツの歴史的動向、P.4~5、東海保健体育科学、Vol.22、東海体育学会、平成12年.
- 58) 谷崎潤一郎：神童、「谷崎潤一郎全集・第3巻」、P.356~357、中央公論社、東京、1992.
- 59) 谷崎潤一郎：旅のいろいろ、P.171、中央公論社、東京、1999.
- 60) 高峯 博：女性肉体美学、P.56、広文堂書店、東京、大正10年.
- 61) 高峯 博：前掲書、P.57.
- 62) 前田 愛：近代文学の女たち、P.194、岩波書店、東京、1995.
- 63) 鹿野政直：大正デモクラシー、「日本の歴史・第27巻」、P.304、小学館、東京、1976.
- 64) 大宅壮一：前掲書、P.264~265.
-
- 三好郁朗：フランス文学とスポーツ、法政大学出版局、東京、1989.
- 中島俊郎編：歴史と文学、みすず書房、東京、2001.
- 田之倉稔：演劇都市と身体、晶文社、東京、1988.
- 成田十次郎編：スポーツと教育の歴史、不味堂出版、東京、1988.
- 川村英男：日本体育史、新体育学講座・第61巻、逍遙書院、昭和47年.
- 小野芳郎：〈清潔〉の近代、講談社、東京、1997.
- 鷺田清一：悲鳴をあげる身体、PHP研究所、東京、2000.
- 養老孟司：身体の文学史、新潮社、東京、2000.
- 三浦雅士：考える身体、NTT出版、東京、1999.
- 黒田 勇：ラジオ体操の誕生、青弓社、東京、1999.
- 三橋 修：翔べない身体：三省堂、東京、1982.
- 三浦雅士：身体の零度、講談社、東京、1994.
- 江崎 徹編：〈身体〉のイメージ、ミネルヴァ書房、京都、1991.
- 小口信吉他訳：身体と文化、文化書房博文社、東京、1999.
- 市野川容孝：身体／生命、岩波書店、東京、2000.
- 須田 朗訳：語りあう身体、紀伊国屋書店、東京、1992.
- 井上 俊他：身体と間身体の社会学・現代社会学4、岩波書店、東京、1996.

(受理 平成13年3月19日)